

忍藩士世川作之丞宛て妻りう書状

行田市郷土博物館所蔵

天保13年（1842）8月、江戸幕府は異国船の来航に備えるため、忍藩主松平忠国に江戸湾（現東京湾）の沿岸警備を命じた。房総半島の富津（千葉県富津市）から白子（同県南房総市）にかけての海岸のうち、佐貫藩（同県富津市）の領地を除いた場所が忍藩の管轄となりました。藩士たちは富津や竹ヶ岡（同県富津市）にあった陣屋に派遣され、ここから海岸の砲台や遠見番所（見張り小屋）に交代で詰めて警備に当たりました。

慣れない土地への赴任は、送り出す家族もさぞかし心配したことでしょうし、藩士も国元の家族に思いをめぐらしたことでしょう。その気持ちや互いの近況を伝えるため、忍と竹ヶ岡の間で頻りに書状を交わした藩士と家族がいました。世川作之丞とその家族で、1年間で実に37通もの書状が残されています。

写真の書状は天保14年5月16日付で、妻のりうから夫の作之丞に宛てたものです。女性らしい



世川りう書状

仮名書きの筆跡で、書き出しから「内々に私へ下さったお手紙を拝見しました。たびたび私の夢を見ていられることはありがたき、本当に私もあなた様のことは朝夕忘れる暇なく、懐かしく思い暮しております。お酒を召し上がった時は、おおりう おりう」とお呼びなされて、皆さんが笑っているとのこと、勤番中の方は皆さんこのようなことが多いのもっともだと思えます。・」と夫への思いをつづっています。さらに、早くお目にかかりたい、酒もさかなも少しづつ召し上がって健康に気を付けるようにと夫を気遣う内容が記されています。

この書状は武家の女性が夫を思う気持ちを素直に表していますが、他の書状からも当時の武士とその家族の考え方や暮らし振りを知ることができます。これらの書状はまさに忍藩士と家族の「生の声」を伝える貴重な史料群であるといえます。

（郷土博物館 鈴木紀三雄）

特定非営利活動法人
ぎょうだ足袋蔵ネットワーク

かつて足袋の全国生産量の8割を占めていた行田。市の中心部には現在も数多くの足袋蔵が残されています。足袋作りで栄えた歴史を行田独自の「文化」ととらえ、足袋蔵を生かしたまちづくりに取り組んでいるのが「特定非営利活動法人ぎょうだ足袋蔵ネットワーク」です。

同法人は、平成16年に設立され現在43人で活動しています。足袋工場など古くからの建物を利用した「牧禎舎」や「足袋とくらしの博物館」などを運営する他、「ぎょうだ蔵めぐりまちあるき」、「アーツ&クラフツinぎょうだ」などのイベントも開催。地域の人に外からの視点を意識してもらい、足袋の文化に触れてもらう機会を提供している他、蔵を利用したい人とのマッチングや地縁によらない新たなコミュニティの形成を図っています。

「足袋というオンリーワンは、行田のまちにとって何物にも代え難い文化である」との熱い思いを胸に活動しています。

【代表理事】朽木 宏 【電話番号】552-1010

つながる ひろがる みんなのチカラ

～市民公益活動団体紹介～①



「蔵めぐりガイドブック」を編集している様子

今月の表紙

12月10日、総合福祉会館「やすらぎの里」中庭で、三世代交流「もちつき会」が行われました。

地域の子・親・高齢者が触れ合うことを目的に開催され、この日は25人が参加。周りの大人たちの「よいしょ!」という掛け声に合わせて、子供たちは慣れない手つきできねを振り下ろしていました。

- 市報ぎょうだに掲載されているあなたの写真を差し上げます。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当(内線318)まで。
- 市民の皆さんの市政に対するご意見をお待ちしています。
- 市報をデジ版に録音したものを希望者宅にお届けします。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当(内線318)までご連絡ください。



市報ぎょうだは再生紙を使用しています